



日本外交協会報

The Society for Promotion of Japanese Diplomacy

発行:(一社)日本外交協会 URL <http://www.spjd.or.jp>

平成27年 10月 10日号

「イラン核交渉の妥結と波紋」

駐イラン大使

小林 弘裕 氏

(平成 27 年9月 25 日 於日本記者クラブ)



(講演要旨)

イランは 1979 年に革命が起き、10 年後の 89 年にホメイニからハメネイに最高指導者が代わり現在に至っています。大統領は 97 年からハタミ氏が 8 年務めました。2000 年には日本を訪問し、当時は「文明の衝突」などの議論があったのですが、ハタミ大統領は「そうではない。文明の対話だ」と言って、東大寺の森本長老らとの対話、国会演説、東京工業大学での講演もこなし、当時の森総理と首脳会談を行いました。私は当時、担当課長である中近東 2 課長で、お膳立てのために、走り回っていました。改革派のフレッシュな大統領が登場、来日したので前途は洋々、これでイランも新しい時代に入るに違いないと確信したのです。

ところが実際は 2002 年にイランが秘密裏に核施設建設を行っていたことが発覚しました。驚いた全世界は EU を中心に 03 年から様々な核交渉を始めました。ハタミの改革派としての表の顔の裏で、核活動が並行して進んでいた訳です。

05 年にハタミの任期が終わりアフマディネジャード氏という保守強硬派の大統領が就任しました。06 年以降、制裁関連の安保理決議が合計 7 本出ましたが、イランは 09 年からは 20%濃縮活動を開始。対抗措置として 12 年には欧米の対イラン制裁強化(原油輸出削減など)が発動されました。特に日本にとって効果があったのは 12 年のアメリカの対イラン制裁強化でした。決済などの銀行業

務がほぼできなくなったので、12 年ごろからは対イラン投資、貿易という経済活動は非常に低調になってきました。

13 年 8 月にはローハニ政権ができました。ローハニは保守穏健派。非常にいいバランスを持った人で外国と話ができて、最高指導者ら保守派の受けもいい。関係をうまく取り仕切っているから、内政をうまくにらみながら外交も仕切れる非常に腕の立つ人です。ローハニ政権になってからザリーフ外務大臣とアラグチ外務政務次官らが中枢となって EU、アメリカとの交渉がスタートし、13 年 11 月にはジュネーブ合意。「第一段階の措置」が導入され部分的な制裁解除がされました。15 年 4 月にはローザンヌ合意。ここで大枠ができ、7 月 14 日にウィーン合意が成立しました。何回も延期され、何回もだめになりそうな場面を経てようやく合意に至った、非常に喜ばしい合意だと思っています。

この合意で包括的共同作業計画、JCPOA (Joint Comprehensive Program of Action) ができました。EU 3+3 とイランが核問題に関する最終合意文書として公表したもので、イランの原子力活動に制約をかけつつ、それが平和的であることを証明し、これまで課された制約を解除する手順を詳細に明記したもので、日本は国際不拡散体制の強化であり中東地域の安定に資するとして高く評価しています。

国連制裁が解除されても個別制裁は残る？